

見捨てられた王子は
最強の竜帝陛下に食べられたくない

・ルデイス・

セライナの腹心の竜族。
不愛想なセライナの分まで
よく喋る人懐こい男。
セライナのよき友でもある。

・アグエン・

竜族の先帝の息子。
自分こそが竜帝に
ふさわしいと思っており、
セライナを敵視している。

・ラミ・

白猫の国の二番目の王子。
狡猾で尊大な青年。
リドとミカに複雑な思いを抱き
酷く嫌っている。

・リド・

白猫の国の一番上の王子。
兄弟達の中では唯一
ミカを可愛がってくれた。
今は亡命中。

・ミカ・

白猫の国の末王子。
兄達から虐げられてきて
自己肯定感が低い
が、心優しく穏やかな青年。
ある隠し事があり……

・セライナ・

竜の国の皇帝。
高潔で公正な美青年。
少々不器用で笑うことも
苦手なせいで
ミカにも誤解されている。

目次

見捨てられた王子は最強の竜帝陛下に食べられたくない	7
番外編 白猫の国の王子達	267
番外編 竜帝陛下の好物	305
後日談 黄金の猫と漆黒の竜	323

見捨てられた王子は
最強の竜帝陛下に食べられたくない

1、竜の国へ

静まり返った牢の床に、涙の雫が落ちる。

泣いても泣いても、涙が尽きることはなかった。頬を濡らしたミカは、このままではいつしか体が干上がってしまうのではないかと思った。

外の世界と切り離された地下牢には不気味な静寂が漂っており、暗闇と湿った空気がミカの気持ちを沈ませている。

壁際で膝を抱えて座っているミカは、顎からしたたる涙を拭うのをとうにやめていた。

頭に生えた尖った耳と、尻の辺りから生えた白くて長い尾。それは幾分薄汚れてはいるが、白猫を彷彿とさせるものである。

ミカは白猫の獣人だ。そして——王子でもあった。

(こんなみずばらしい姿を見たら、誰も私が王子だなどとは信じないだろう)

酷く粗末な服に身を包んでいる上に、鼻をすすって泣いてばかりいるのだ。一応ミカは成人したばかりだが、これほど情けない成年の王族がいていいはずがない。

(どうして自分が泣いているのかわからない。何がそんなに悲しいのだろう。泣いたって、何も

変わるわけではないのに……)

兄王子達の言う通り、自分は臆病者なのだ。開いた手のひらに目を落とし、力なくそれを握ってかぶりを振る。

(これからどうなるのだろう。私はどうしたらいいのだろう)

何もかもが恐ろしくて、考えることを放棄したミカは立てた膝に顔を埋めた。

と、複数の足音が微かに聞こえてきて、ミカの猫の耳は敏感に反応する。

近づいてくるのは当然、自分を捕らえた種族の——鼠の耳を生やした鼠族の獣人の牢番のほずだった。今までそれ以外の者がやってきたことはない。

牢番が手にしているたいまつが揺れながらこちらに向かってきて、二人の影を浮かび上げさせた。一人はいつもの牢番で、もう一人はここで見かけるはずのない、予想もしなかった人物だった。

「ミカ。外に出る」

「兄上……？」

ミカの兄、第二王子のラミがそこに立っている。

煌びやかな刺繍の施された白い衣服は王子の衣装であり、上等なマントには染み一つない。胸を張った堂々とした立ち姿といい、まさに王族といった雰囲気である。

間違いない兄であり、幻でもなさそうだが、何故彼が今、こんなところにいるのだろうか。

兄達はミカを鼠の国へ放り込んでからは、あんな生き物には近づきたくないと言って、手紙の一つも寄越さなかった。見限られたのだと思ったミカは、兄と再会することがあるなどとは想像すら

しなかったのだ。

（もしかして、兄上も捕まってしまったのか？）

だが、兄が拘束（こうそう）されている様子は無い。隣に立つ牢番は鍵を取り出し、何故か牢の扉を開錠した。ミカは呆然とその動きを見守る。

「兄上、これは一体どういう……」

ミカはよろめきながら、兄の方へと歩み寄った。兄のラミが即座に侮蔑（ぶべつ）の視線を投げってくる。

「そのおぞましい目で私を見るな」

はっとしてミカはうつむいた。

たいまつに照らされた兄の嫌悪に歪（ゆが）む顔を見た途端、自分と彼の関係性を思い出した。今まで浴びせられた数々の暴言と、受けてきた暴力。彼は――彼らは、私を憎んでいる。

白猫の瞳は、皆美しいスカイブルーと決まっていた。純白の髪と空色の宝石のような瞳は、白猫族達が誇るものだ。

しかし、どういうわけかミカはオッドアイで、左目が黄金色なのである。まるで蛇のようだと、周りからは忌避（きひ）されていた。普段はそれを伸ばした前髪や眼帯で隠しているのだ。

下を向いて前髪の上から左目を押さえたミカは、兄が来た意味と、牢から出された理由を考え始める。

（ああ、もしかして私は、今から処刑されるんだろうか……。役立たずで、何もしないまま、いつまでも敵国に囚われているなど国の恥だから……）

それ以外に何があるだろう。兄のラミ王子が自分を助けに来るはずなどないのだし、醜（みにく）い目をした弟が殺されるところを見届けに来たのだ。

ミカの両目に、じわりとまた涙が浮かんできた。死ぬのは怖い。どれだけ疎（うと）まれても無能でも、死にたくないと思ってしまう。

「何をもたついている、さっさと出てこい！」

兄は触るのも汚らしいといった様子で、両腕を組んで待っていた。ミカは覚束（おぼつか）ない足取りで牢から出て、兄と目を合わせないよううつむいたままだった。

「ついてくるんだ」

兄が先導し、ミカが続いて、さらに牢番の兵士が後を歩く。きつとこれから処刑台まで引きずられていくに違いないと青ざめていたミカだったが、何か様子がおかしいことに気づいた。

しばらくぶりに出た地上は晴れていて、眩（まぶ）しい陽光が目を射る。そこでよくよく確認すると、青ざめているのは自分だけではなかったのだ。

何故か兄のラミも、鼠族の牢番の兵士も顔面蒼白なのである。二人とも顔に冷や汗を浮かべており、何かに怯えているかのような顔つきだった。

ミカが囚われている鼠族の城は、土色で出入り口のたくさんある小山に似た、猫族からしてみると変わった建造物である。地下から出て外の通路を歩いているのだが、耳を澄ませてみると妙に静かだった。まるでここにいる全ての者達が、緊張で息をひそめているかのようだ。

牢番も、先程から一言も喋らない。いつもは牢の外から長い棒を使ってミカをつつき、愚弄（ぐろう）して

くるような連中である。猫の獣人を見たなら馬鹿にしなければ気が済まないというような者達なのに、今日は何も言わないどころか、目すら合わせてこなかった。

「兄上、どこへ行くのか教えてくださいませんか……」

たまりかねてミカがおどおどと声をかけた瞬間、鬼の形相をした兄王子が振り返り、ミカの胸倉をつかんで引き寄せた。

「黙っている、この出来損ないめ！ 我ら王家はお前には心底愛想を尽かした。何もせぬならさつさと鼠どもにいたぶられて死んでいればよかったものを。おかげでより面倒なことになったではないか！ いいか、くれぐれも粗相のないようにしろ。お前が失敗すれば、我ら白猫族は滅亡だ！」

何の話だかさっぱり呑み込めない。長い前髪がさりと揺れて、ミカの黄金の瞳があらわになった。兄は舌打ちをすると、ミカの胸を手で突く。よろけながら、慌ててミカは片目を隠した。

「何故よりによってミカを……」

と、吐き捨てるように言う兄は歩き出し、ミカはそれに続いた。

白猫族が仕掛けて始まった茶色鼠族との戦争はつい先日、猫側の敗戦という形で決着がついた。そこでさまざまな取り引きがあり、ミカは詫びの品のような形で鼠族に押しつけられたのである。

矜持^{きんじ}をズタズタに傷つけられた白猫族の王族達は、鼠のネの字を聞くのも嫌がついていた。五人の王子の中でも最も高慢な第二王子ラミがこうして鼠族の城へ足を運ぶなど、考えてみれば異常事態だ。

ラミがわざわざ自らやってこなければならぬ何か起きたということなのか。

もしそれがミカの処刑なら、皆これほど絶望的な表情は浮かべていないだろう。

時折他の鼠族の兵士ともすれ違ったが、誰もが顔を強ばらせている。

付き添っていた牢番は別の、もつと位の高そうな兵士と入れ替わり、ミカ達は城の中を進んでいった。どうも行き先は処刑場ではなさそうである。

巢穴のように入り組んだ城内を、ミカはひたすら歩かされた。どこがどこかわからないままたどり着いた一室は、賓客^{ひんきやく}を迎える部屋らしい。

張り詰めた空気の中、扉の前に立つた兵士が真つ青な顔で「ミカ王子をお連れいたしました！」と声を張り上げた。ラミ王子も血走った目でそこに立っている。

ミカだけが彼らと同種の恐怖を共有できないまま、わけもわからずうろたえていた。何の心の準備もさせてもらえずに、美しい装飾が施された扉が開く。一体この中に、何が待っているというのか。

部屋はミカが想像した通り、国賓^{こくひん}などを通す場所であるらしかった。一級の調度品が並ぶ、豪華な空間である。

しかしそこにいた何者かの存在感が、そういった品々の素晴らしさを霞^{かす}ませていた。

こちらに背を向けて、一人の長身の男が立っている。腰まで届く黒い艶やかな髪。後ろ姿だけでもただならない威圧感を放っており、それを肌にびりびりと感じるほどであった。

その人が、ゆつくりと振り向いた。

白哲^{はくせき}の美貌。彼の顔立ちの全てが、完璧に整っている。気品に溢れていて、近寄りがたい美しさ

だ。切れ長の目は冷たく、慈悲の欠片もないように見えた。

ミカがこれまで見た何よりも美しく、畏怖^{いふ}を覚えるほどの姿である。

ミカはその場に凍りついた。誰だって、この人の前ではそうなるだろう。

兄が紹介するのを、ミカは上の空で聞いていた。

「ミカ。この方は先日第九十七代竜帝に即位された、セライナ陛下だ」

竜帝とか聞こえた気がする。

竜族の存在はミカも知っていた。天界を支配する彼らは翼を持つ種族で、自分達と同じ獣人でありながら別格の生き物であった。長きにわたり地上に降りてきたことなどなく、半ば^{なか}伝説めいた種族だ。

それが何故今、地上に？ しかも、竜帝が。

停止しかけた思考に、じわじわと恐怖がにじんできた。竜族というだけでも大変なことだが、竜帝となればその中で最も位の高い者であるはずだ。

唯一にして最強の、天を統^すべる竜。

どうして自分は今、竜帝などと向かい合っているのだろうか。

緊張と混乱で、ミカは放心状態だった。

ミカと兄王子と兵士は、竜帝の前で立ちすくんでいた。竜帝はかなり背が高く、小柄な猫族や鼠族とは相当な身長差があった。何故か竜帝の視線はミカ一人に向いている。それに気づいたラミがひきつったような笑みを浮かべて言った。

「我が弟は、あまり良い待遇を受けられなかったようだな。こんなに痩せてしまっ」

それに兵士が慌てて答える。

「食事はお出ししておりました。ミカ王子は、猫の国から送られたショックで食べ物^{食べ物}が喉を通らなかったのではないかと……」

竜帝の顔色をうかがいながら、ラミと兵士は睨み合っている。

食べ物^{食べ物}は確かに出されていた。干からびた根菜やら冷めたスープではあったが。しかしもっとましな料理が出されたとしても、食べる気にはならなかっただろう。

ラミと兵士は何やらこそこそ言い合っている。

「貴様らの王族はどうした？」

「この件は我々には関係ない、竜帝陛下と猫族の問題であるから、邪魔をするわけにはいかないだろう、と下がられました」

「逃げやがったな……！」

恨めしげに歯噛みしてラミが呟いている。そして兵士までがそそくさと退散し、この場に残されたのは竜帝、ラミ王子、そしてミカだけになった。

ラミはため息をつく、竜帝セライナに声をかける。恐れがないわけではなさそうだが、それを隠して平静^{よそお}を装うとする胆力の強さはさすがラミといったところだろう。この兄はプライドだけは高いのだ。

「竜帝陛下。ご用件に関してですが、こちらからは特に異存はありません。煮るなり焼くなり、お

好きにどうぞ」

一体、何がどうなっているのかさっぱりわからない。

竜帝セライナはミカに視線を投げたまま、目を細めた。この人の瞳に、自分の姿が映っている……そう思うだけで、自分がどれほど卑小な存在か自覚して膝が震えそうだった。

「迎えに来たぞ、ミカ」

そう言って、セライナは——にいつと笑った。

正直、その笑顔は今までミカが見てきたものの中で、三本の指に入るほど恐ろしいものだった。研ぎ澄まされた冷たい刃が放つ光を思わせる表情。睨まれる方がまだましだ。

美しい死の宣告のような笑みを向けられたミカは——

耐えきれずに、その場で失神したのだった。



かつてこの地上を支配していたのは、純血の人間だったと言われている。人間達は争いを続けて数を減らし、いつしか絶滅の危機に瀕していた。

そんな人間達を哀れに思った神獣は使役する獣達を人の世に送り、人間達と番わせて数を増やす手助けをしてやったのだった。

そうして誕生したのが獣人で、現在は数多の種類の獣人達が存在する。

それも遠い昔の出来事となり、今では言い伝えられている内容以上のことはわかっていない。残っている文献も多くはないので、詳細は不明だった。

とにかく人間達は獣と血が混ざり、無事に数は増やしたものの、争いごとが地上からなくなることはなかった。

獣の特徴を持つ獣人達は相変わらず縄張り争いを続け、戦や小競り合いは絶えず、現在に至る。獣人の中でも最も力を持っているとされているのは、竜族だった。天上に竜族が住んでいるという事実は地上の者達は誰もが知っていたが、交流を持つ種族はないに等しい。

遠い昔、初代竜帝が天と地上の間に結界の膜を張り、互に行き来ができないようにしたためだ。空の覇者、圧倒的な力を持つ竜族に、地上の種族達は滅ぼされる時が来るのを恐れていた。

初代竜帝は地上の者達を刺激しないように、自分達は他種族を支配しないと約束するために結界をこしらえたのだ。そしてまた、竜族が間違いを犯さないように、地上との関係を断絶させたのだった。

地上の種族にとって、竜族というのはおとぎ話に出てくるような、縁遠い存在であった。



「う、……ん」

ミカはゆっくりと目を開け、何度か瞬きをした。

体を起こしてみると、見知らぬ寝台の上にいる。はて、何故自分はこんなところにいるのだろうかかと首を傾げた。

（確か、私は……牢屋に入っていたはずだった、よな？）

そうだ。白猫族の王子である自分は、詫びとして鼠族に捧げられたのだった。ミカに言わせると、やらなくてもいいような戦を白猫族が茶色鼠族に仕掛けたのだ。あんな溝鼠どもは駆逐してくれるわと兄王子達は張り切っていたが、鼠達はとても賢く、こちらは逆に領土を奪われる羽目になってしまった。

ミカはそもそも自国でほぼ幽閉されていたに等しい、使い物にならない王子であり、身内からも忌み嫌われている存在だったので、鼠達の中に放り込まれた。

そんな事情を鼠側もある程度知っていて、しかし猫の王子など暇つぶしにいたぶるにはもってこいと受け取ったようだった。

（そう。私は鼠の国でも牢に入れられて、毎日小突かれて、馬鹿にされて……）

玩具にするのに飽きたら殺されるに違いない。白猫族側へは病気で死んだとか、いくらでも嘘はつけるのだ。そもそも戦勝国側であるし、びくつく必要はない。

ミカには助かる道がないでもなかったのだが、それを実行する勇気がなくて、毎日膝を抱えて泣いていたのだった。

そして、何故か兄王子のラミが現れて、どこかへ連れていかれて――

あの、世にも恐ろしい残忍な笑顔が頭に浮かび、ミカは恐怖で毛を逆立てた。

（いや待て、あれは夢かもしれない。いくらなんでも、天上の竜族が私の前に現れるはずがない）と自分に言い聞かせるも、夢を見ていたのだとするとミカはいつもの冷たい牢の床の上で目を覚まさなければならぬはずだ。

——ここは一体、どこなんだ？

竜帝とかいう幻のような存在に微笑みかけられたのが現実であるなら、牢の中にいるより怖い。こういう展開なのだから理解不能なのだ。

周囲に視線を走らせ、自分の置かれている状況を確認しようとする。

窓掛けが引かれて光が遮られていたが、薄ぼんやりとした光が見えるので夜ではないらしい。部屋も寝台もやたらと広く、いかにも高貴な者にあてがわれるような雰囲気であった。ミカも王子という身分なので、一応高級品の知識はある。寝台、寝具、絨毯に机、椅子。香炉や水差し。ここにあるどれも、鼠族の城の貴賓室以上の質のものであった。

自分の体に目を落としてみると、汚れた服は着替えさせられており、身も清められていた。

牢屋より心細い場所があるとは初めて知った。ミカは恐怖に震えながら、己の身を抱きしめる。体はどこも無事であり、触って確かめてみたが耳も尻尾も欠けていない。痛むところもない。知らない間に折檻されたようではなかった。

寝台のそばにある台に何かが置いてあるのに気づいた。どうも手紙であるらしく、見覚えのある第二王子ラミの筆跡でミカへの宛名が記されている。

何もわからない中、何をするのも恐ろしいが、自分宛ての手紙を読むのはきつと構わないだろう。

ミカは封を開けて怖々と中に目を通した。やはり兄が綴ったものらしく、怒りで筆跡は乱れている。猫族が使う猫文字は丸っこくて愛らしい形が特徴なのだが、兄の綴るそれは刺々しかった。激しい怒りが感じられ、直接怒鳴られたわけではないがミカは怯えてべたりと耳を倒した。

手紙には、竜帝がミカの身を預かることとなり、白猫族の王家と茶色鼠族はそれを了承したこと、ミカ自身には拒否権がないことなどが書かれている。

竜帝がお前のような落ちこぼれを選ぶ理由が全くわからない、と兄は怒り狂っているが、それはミカも不思議だった。『王子であるくせにまるで売女』だの『いつ色目を使った』だの、ミカの知らない言葉がいくつもあったが、非難されているというのはなんとなく理解できた。

そして最後の方に書かれている文章に目をやり、息を呑む。

『とにかく、お前は竜帝におとなしく食われる身だ。せいぜい上手くやるのだな』

他にも何やら書いてあったが目に入ってこない。ミカは目の前が真っ暗になるのを感じていた。

（食われる……？ 私は、食べ物として竜帝陛下に引き取られたのか……）

獣人は皆、半分は獣で半分は人間だ。つまり、半分同種族とも言える。通常、獣人は共食いをしない。しかし中には食べる種族もいると聞くし、遠く離れた天空で暮らす竜族の食事に関して、ミカは何の知識もなかった。

獣人の中でも最も強い力を持つ竜族だ。その食文化が地上の獣人と同じとは限らない。

（魚は魚を食べるし、鳥の猛禽もうきんは小鳥を食べる……。竜が猫を食べたって、別に不思議ではない……）あぁ。ということは。

ついに自分の運命は決定してしまったのだ。

思い返してみると、竜帝と対面した時、兄も煮るなり焼くなり好きにしろと言っていた。

（い、いやだ……。私は、食べられたくない……！）

ミカは手紙を握りしめたまま、よろよろと部屋の扉の方へと歩き始めた。裸足はだしで毛足の長い絨毯を踏む。

何か策があったわけではなかった。ただ本能が、生きたいという気持ちでミカの足を動かしている、頭の中はほとんど空白だった。

扉の前まで来たところで、その向こうの部屋に誰かが入ってくる物音が聞こえ、ミカは体を硬直させた。

「ミカ様が失神された理由は当然、あなたのお顔が怖すぎるからですよ……。どうにかありませんか、その笑い方」

呆れたような男の声だ。それに他の誰かが返事をする。

「これでも以前よりは柔らかくなった方だ」

これは聞き覚えがある。竜帝セライナの声だ。ミカは息を詰めた。

「どこがですか。付き合いの長い私だってぞっとしますよ。いきなり竜帝だという男が現れて、強烈な微笑みを向けられたら、そりゃあ気も失いますって。どうして笑うかなあ」

竜帝と言えば竜族の頂点に君臨する者のはずだが、その竜帝に対して男はやけに気安い調子で話しかけている。

「いろいろ焦らないでくださいよ？ 即位の儀を終えてすぐに地上に降りるなんて、本当にせっかちな方だ」

「私はかなり待ったのだ」

「わかってます、前から聞いております。ですから、落ち着いて順序を踏んで……。でないミカ様もお気の毒でしょう？ くれぐれも、いきなりがつくようなことはやめてくださいよ」

がつつく、という言葉聞いたミカは真っ青になった。

竜帝が短い沈黙の後に口を開く。

「……味見くらいはいいだろうな？」

「いや、あなたの味見っていうのがどれくらいかの行為を指してるのかわかりませんけど……。ほどほどにしてくださいよ。嫌われても知りませんからね」

間違はなく、自分は竜帝に食べられるために運ばれてきたのだ。ミカは後ずさり、震える手から手紙が落ちた。

下には絨毯が敷かれているから、音などほとんど立たなかったはずだった。

しかし、隣の部屋での会話は途切れ、次の瞬間、こちらへの扉が開かれた。扉のすぐそばで話をしていたのではなかったようだが、音を聞きつけてすぐ、竜帝ではない方の男が移動して扉に手をかけたらしい。

薄暗い部屋に、光が射し込む。

そこには、純白の長い髪が目をはく、灰色の瞳の美しい男が佇んでいた。

「これは、白猫族の第五王子、ミカ殿下。お目覚めになられたようですね」

長身のその男は、優しい微笑をミカへと向ける。ミカは呆然とその竜族らしき男を見上げることにできなかった。

これで竜族を見たのは二人目だ。竜帝と違って穏やかな印象の男だが、それで緊張が和らいだりはしない。

（盗み聞きをしていたのがバレただろうか？ 私はこの場で処刑されるのか？ 勝手に寝台から離れるべきではなかったのかもしれない。寝たふりでもしていれば……）

何か言わなければならないのに、声が出てこない。空っぽの頭からは何の台詞も見つけれない。

白い長髪の男は言葉を失って立ち尽くすミカの態度を不審に思った様子もなく、「お体の具合は悪くありませんか？」と尋ねてきた。のろのろとミカが頷くと、彼も頷き返す。

「世話係の者を連れてきますので、少々お待ちください」

そう言い置いて立ち去ろうとする。

ミカが男の向こうへと目をやると、気絶する前に対面した、あの竜帝が立っていた。白い竜族の男は部屋から出ていく前に、びしっと人さし指を竜帝へ向けた。

「笑わないでくださいよ、陛下」

そんな注意を受けた竜帝セライナは、不服そうに目を細めて男を見送る。

そして、セライナはゆつくりとミカの方へと歩いてきた。一步一步に重みがある。そしてこの威圧感。

ミカは両目を大きく見開いてセライナを見つめていた。

夜の一等美しい部分を紡いだかのような黒く長い髪。彫刻のような顔立ち。氷の刃を思わせる双眸は、玲瓏たる光を湛えている。猫族の誰よりも背が高く、体つきは見るからにたくましかった。半分は同じ人間、同じ人型であるはずなのに、自分とはまるきり違う生き物のようだった。

ミカは王族であり、どういう理由で連れてこられたにしろ、何かしらの挨拶はするべきだ。

口を開こうとしたところ、しかし先に声を発したのはセライナの方だった。

「猫はミントが苦手だと聞いた。昔の私は知らなかったが」

思いの外静かな声で、柔らかく耳に届く。突然植物の名前が出て、ミカは混乱してしまった。確かに猫はミントを嫌っている。四つ足の獣の方の猫もそうであるし、獣人であってもそれは同じだ。

「ミント……ですか？」

「ああ。お前は兄弟達に、群生するミントの中へ放り込まれたりしたのだろう？ 他にもたくさん、酷い仕打ちを受けたと聞いている」

幼い頃の記憶は曖昧な部分が多いのだが、ミカは昔から兄弟達には特に邪険にされ、いじめられてきた。ミント畑に放置されたり、ミントの香油を上からぶちまけられて始終その香りを漂わせて皆に避けられたり。おかげでミントの香りには慣れてしまつて、自分は平気になったのだが。

「私は、醜い猫ですから……。仕方ありません。王族の中にこのような者が生まれて、疎まれるのは当然です」

ミカがうつむくと、長い前髪が目にかかる。眼帯をつけるのは苦手なのだが、誰かに用意しても

らえばよかったと後悔する。この醜い目は、皆から嫌われてしまうのだ。

すると、セライナがミカの顎をつかんで上を向かせた。

「お前は醜くなどない」

セライナはミカの前髪を払つて黄金の目をあらわにさせた。とつさに身を引こうとしたが、考えてみればセライナの瞳は黒だ。今まで、周りと違う者は異様な存在として差別されるものだと思ひ込んでいたのだが、ここにいるのは竜族ばかり。ミカの片目の色が皆と同じ青でないことで嫌悪されたりはしないのかもしれない。

「お前は、世界で一番可愛い——愛らしい猫だ」

セライナはミカの頬に手をそえたまま、顔を近づけてきた。

(あ……えっ……？ 食べられる……!?)

ミカの頭に唇を押しつけたセライナは、呆然とするミカをしばらく見つめ——ニイツと、控えめな微笑を浮かべた。

前の時よりかなりおさえた表情ではあったものの、やはり恐ろしいのは変わらない。獲物をしとめる直前だとか、好物を前にした時に浮かべるような笑みなのだ。だからだろうか、本能的に敗北を悟って体から力が抜けてしまう。

ミカがその場で崩れ落ちそうになるのを、すぐにセライナが支えた。

「どうした」

「その……、こつ、腰が……」

卒倒こそしないで済んだが、ミカは無様にも竜帝の前で腰を抜かしてしまったのだった。

◇

絞め殺されるのだ、私は。

自分の喉に、竜帝セライナの大きな手がかかっている。ひんやりと冷たくて、少し手に力を入れればミカの細い頸など容易にへし折ってしまえるだろう。

「私に慣れてきたようだぞ。ほら、喉を鳴らしている」

「恐ろしい時に喉を鳴らす猫もおりますよ、陛下。ミカ様は震えていらつしやるじゃないですか」

ミカは何故だかセライナの膝の上に座らされていた。ここへ来てから知ったことだが、竜族は皆高身長である。その中でもセライナはまた長身な方で、ミカとの体格差はかなりのものだ。だからこうして膝にのせるのも平気なのだが——どうしてのせられているのだろうか。

ミカはいきなり抱き上げられてのせられたので、どうにもできずにそこにいる。今度は気絶もせず腰も抜かさなかったのだが、震えだけはおさえられなかった。

セライナは四つ足の猫にやるように、ミカの頸をさわさわとさすついていた。くるる、とミカの口から声もれる。困惑の音である。

「申し訳ありませんね、ミカ様。竜帝陛下は大変な強面^{こわもて}でいらつしやいます、乱暴者ではありませんのでご安心ください。まあ、強面なのに優しくなでてくるから余計に怖いんですよ。

わかりますよ……」

白い長髪の一部を結っているのは先日の彼であり、セライナの側近のルデイスだ。いわく、彼らは幼なじみであり、気安い仲なのだという。ルデイスの役職は宰相だそうだ。

「陛下、あなたはお仕事がおありでしょう。ミカ様も少し落ち着いてきたようですし、私が城を案内してきますから。さあ、もう離してください」

ルデイスがミカを膝から下ろすと、セライナがあからさまに不機嫌になった。彼が眉根を寄せて誰かを睨むさまは、あの笑顔までとはいかないが迫力があつて恐ろしい。

ミカはルデイスの丈の長い服の一部をさがるようにつかんだ。ルデイスは物腰が柔らかく、笑顔も優しいから近づきやすい。自分の服をつかむミカの様子を見て、ルデイスはニマニマと笑ってみせる。

「おや、もしかするとセライナ様より私の方に懐いているのかもしれないですね……」

「調子にのるなよ、ルデイス」

セライナから殺気が放たれ、ミカはいよいよ縮み上がってルデイスの後ろへと身を隠した。

「ほらほら、そんな怖い顔をなさらず。ミカ様がもう近寄ってくださいさなくなりますよ」

黙り込むセライナに礼をして、ルデイスはミカを連れて部屋を出ていった。ルデイスも忙しい身分のはずだが、セライナはミカの身を気心知れた幼なじみにしかまだ任せられないようだった。

——それほど私は、あの方のとっておきの食料だということなのだろうか。
今のところ丁寧に扱われているが、ミカの心中は複雑だった。

ミカが竜族達の住む空の島に連れてこられてから数日が経過した。賓客のような待遇で、これまでの人生で経験したことがない至れり尽くせりの生活を送っている。虐げられるのに慣れているミカにはかえって落ち着かないというか、むしろ痒い感じがしていた。

ここは竜帝が住まう城である。働く侍従も侍女も全て獣人の竜族だ。猫族のように毛の生えた耳や尻尾は生えておらず、種族によつては鱗が体表に見られたりするそうだが、白竜の民はそうではないらしい。耳がやや長く、尖っているくらいだ。

他の色の竜族もいないではないが、ほとんどが白竜であった。

「ミカ様。ここで過ごして何か不足なものがございましたら、何なりとお申しつけくださいね」

前を歩くルデイスが、につこりとしながら振り向いた。ミカはぶんぶんと首を左右に振る。

「足りないものなどありません。ありがとうございます」

渡り廊下を歩いていたミカは、遠くに広がる光景を見てつい足を止めた。

どこまでも青い空が広がっている。

海よりわずかに明るい色で、そこに点在しているのは島々だ。あの宙に浮かぶ島に、竜達は太古から住み着いていた。

自分がいる位置より下に雲が浮かんでいる景色は、何度見ても見慣れなかった。不思議で、そして美しい。

風が前髪を揺らして、ミカはいつものようにぎくりとした。黄金の目を誰かに見られたら大変

だ——しかし、ここではそんな心配をしなくてもいいのだと思いつく。そもそも来てすぐに、前が見にくいから前髪を少し切りませんかと言われてそれを受け入れたのだ。

「高いところは苦手ですが、ミカ様」

立ち止まってしまったミカを注意することもなく、ルデイスが近寄ってくる。

「いいえ。猫ですから、高所は平気です」

「よかった。ここはどこもかしこも高いですからね。何せ、雲の上の世界なので。翼を持たない種族がやってくることは滅多にないですよ。もし苦手でしたら、どう対処していいものか悩みました」陛下はあなたの希望も聞かずにあなたをさらってきたてしまいましたからねえ、とルデイスが笑うので、ミカも苦笑いを浮かべた。どの道、竜帝ほど力のある彼に意見できる猫族などいない。来いと言われたらミカも行くしかなかった。

「セライナ様は不器用なところがありませんけど、一途なのは間違いないですから。安心してください」

それは、食べられない可能性がまだ残っているということなのか、食べられるまではうんと大事にされるということなのか。ミカの暗い気持ちは晴れなかった。

「何かわからないことがあれば、どうぞ気軽にこのルデイスに尋ねてくださいね」

「では、あの……ルデイス。獣人が獣人を食べることはあるのでしょうか」

この質問がルデイスには突飛に感じたのか、彼は少しの間、目をぱちくりさせていた。

「そうですね……。私も下界に降りる機会がないので直接他種族の食文化を知ることにはなかったの

ですが、書物で読んだり噂で聞いたりはしました。あるそうですよ。鬣犬族^{ハイエナ}だったかな、鶯族^ウだったかな。好んで食べるというよりは、儀式ですね。何でも、力が増すそうです」

ということは、竜族でも有り得るわけだ。

どこか他人事みたいな言い方ではあるが、それは当事者である自分に配慮をしているからだろう。ミカはあらためて遠くまで視線を伸ばした。翼のない自分はどこにも飛んでいけない。逃げ場などなさそうであった。



即位したばかりの竜帝は本当に多忙らしく、ミカはあまりセライナと顔を合わせる機会がなかった。けれど夕食の時間になると、彼は食堂にやってくる。

今夜も広い食堂に呼ばれ、ミカが席に着くとセライナも姿を現した。ミカが食事をするところを、何故かセライナはじっと見守るのである。

竜の城に来てからも、ミカは食欲が出ずにいた。それを周りもわかっているようで、出てくる料理は消化に良いものばかりである。

粥^{かゆ}だのスープだのが一品ずつ出され、ミカはちよびちよび口をつける。手が止まると下げられて、また別の料理が出てくるのだった。

かなり気をつかわれているな、と思う。料理だってどれも、猫舌の猫族のために配慮され、冷ま

されていた。

「何が好みだ？」

セライナに尋ねられ、ミカはびくりとして姿勢を正した。

「な、何でも食べられます。好き嫌いはありません……」

本当のことなのだが、何を出されても食べ切れないこの状態では説得力がないだろう。

一流の料理人の手によって作られた料理はどれも味が良い。けれどどうにも、食欲が湧かないのだった。

環境の変化に慣れていないというのもあるが、何より、セライナにずっと見つめられている状況が苦しかった。

「……あの、陛下はお召し上がりにならないのですか？」

「後で食べる」

「でしたら、その……一緒に、というのは、どうでしょうか……」

セライナも時間の節約になるだろうし、ミカとしてもひたすら視線を感じているよりはましである。

しかし、自分の身分で食事を共にしようなどという提案は無礼極まりないかもしれない。発言を撤回しようかと焦るミカだったが、近くにいた竜帝の側近にして宰相のルデイスが、「ミカ様が許可してくださるなら、そうしましょうね」とにこにこしながら給仕に命じた。ルデイスは仕事の途中のようで書類を手にしていたのだが、様子を見に来たらしい。

セライナの前に出されたのは、鹿肉だった。

彼が洗練された手つきでナイフを入れると、肉汁がじゅわつと皿へ広がる。火が通っているのは表面だけで、薔薇色の断面はほとんど生のように見えた。

（ひい……血が……したたっている……）

瑞々しい肉を目の前で咀嚼する、竜族の皇帝。皿は血の海である。ミカは喉の奥で微かな悲鳴を上げた。

（やつぱり……竜族は肉食なんだ。肉を食べるのが好きなんだ。私も近いうちに、あんな風に竜帝に噛み砕かれて……！）

恐怖で歯を鳴らしそうになるのを、ミカはどうかこらえながら硬直していた。するとルデイスが声をかけてくる。

「ミカ様も召し上がりますか？」

「え？」

「猫族も肉食でいらっしやいますよね」

「……………」

ミカはそこで、自分が何者であるのか思い出し、ぽんと手を打った。

いや、そうだった。私も肉食だった。

完全な猫ではなくて獣人なので肉以外も食べるのだが、基本的に猫族は肉好きである。兄達もレアステーキを好んでよく口にしていた。

どうもいずれ食べられるという恐怖と、セライナという男の迫力のせいで、自分を草食動物か何かと勘違いしていたようだ。

「滋養がつきますから。試しに一口だけでも」

とルデイスが言い、セライナも頷きながら「美味いぞ」とすすめた。

では……とミカも同じものを食べてみることにする。血だと思ったのは、ほとんどが赤いソースだった。

柔らかい肉に、ナイフが沈む。食欲がないからどうだろう、と尻込みしていたが、口に入れるとその懸念は吹き飛んだ。

「美味しい！」

豊かな肉汁が口の中に広がって、ミカは衝撃を受けた。どんな調理をされているのかわからないが、実に柔らかくて食べやすい。二口、三口と夢中で食べた。

ミカの様子を見て、セライナも手を動かす。半分以上肉を食べ、ミカは言った。

「これほど美味しい肉を食べたのは初めてです。私も肉というものは食べたことがあります、焼きすぎていたり、時間が経って硬くなったものばかりだったのです。こんなに柔らかいものもあるのですね。感動しました！」

この正直な感想を聞き、気の毒そうに眉をひそめたのはルデイスだった。「そんな嫌がらせを……。おいたわしい」と呟いている。

「そういえば、誰かと一緒に食事をとるのも初めてかもしれません。恐れ多くも陛下とこの素晴ら

しい肉料理を味わっているから、より美味しさを感じるのでしょうか。ありがとうございます！」

ミカは頬を紅潮させて考えを述べた。

一人ぼっちの時間が多かったミカは、誰かと語らいながら食事をするのが憧れだった。セライナはミカにとって恐ろしい存在ではあるのだが、それでもこうして夢が叶ったのは嬉しい。

ミカ的笑顔を見て、ルデイスもセライナも目を見張っていた。だが、セライナの口元が少しひきつって――

「セライナ様！ 笑わない！」

ルデイスが大声を上げた。

「笑って夕食の時間を台無しになさる気ですか？ あの凶悪な笑顔をミカ様に見せてしまったら、せっかく出てきたこの方の食欲も引つ込みますよ」

セライナの眉間にしわが刻まれる。

城でこれほど竜帝に不敬な態度を取れるのはルデイス一人だけであつた。セライナが少しでも不機嫌になると相当恐ろしさが増すのだが、ルデイスは平気なものである。

「あなたの強面は敵を威圧する時にはこの上なく効果的な武器になりますし、威厳にも繋がりますが、味方まで震え上がらせてしまいますからね！ 毎晩鏡を見て柔らかに笑う特訓、しているので何か？」

している、と苛つきながら言うセライナに、ルデイスは見せてみると迫る。ミカに見えないよう書類で顔を隠しつつ、セライナはルデイスに微笑みを見せていた。

「ああ、怖い！ 夢に出そうだ！ 全然ダメではないですか！」

ぐる……とセライナが怒りで喉を鳴らしているので、ミカはフォークを取り落としそうになった。「すみませんねえ、ミカ様。どうぞ、この強面は放っておいて、お食事を続けられてください。セライナ様に付き合っていたき感謝申し上げます」

言いたい放題である。ルデイスはことあるごとにセライナに暴言を浴びせているが、それで関係が悪化したりはしないようだ。軽口を叩き合う間柄というのはわかるが、わざと怒らせるようなことを言うので、見ているミカは内心ハラハラしていた。

二人はもう仕事に戻らなければならぬらしく、ミカにはゆっくり食事をとるよう言ってきた。

ミカの横を通り過ぎる時、セライナがミカの手首をそっと握ったので、ミカは不思議に思いながら彼の方を見上げた。

「とにかく食べる、ミカ。お前は痩せすぎだ」

そして竜帝と宰相は食堂から出ていく。ルデイスが「どさくさにまぎれて触りましたね」と言い、セライナが「うるさい」と返事をするのが聞こえた。

妙に優しく触られた手首にミカは反対の手で触れ、確かに細いかもな、とさする。不健康な生活をしていたので肉付きがよくない。

どうせ食べるなら、肉がついていた方がいいに決まっている。セライナはミカを太らせようとしているのかもしれない。

食事の時に見張りに来ていた理由はそれか。そうとわかれると食欲が少し減退してきたが、肉はやっ

ぱり美味しくて、ミカは久しぶりに料理を完食したのだった。



まだセライナが新たな竜帝に決まる前のとある晩。セライナは父公爵と竜帝選挙について話合っていた。

竜帝は帝国諸侯による選挙によって選ばれる。選挙といっても最終的には力がある者がその座を手にするわけで、推挙された個々人の実力がものを言うのだ。

権力の集中や魔力の消耗のため、一定期間ごとに竜帝は代替わりする。御前試合の結果を参考に、他の資質なども加味して決められるのだった。

候補はかなり絞られており、その中でもウィンエル公爵子息のセライナは最も有力視されていた。どれほど期待されても持ち上げられても、セライナは淡々とした調子を崩してはいなかったが。

現竜帝が近頃どうにも評判が悪く、竜族全体にうつすらしい臭い空気が漂っているため、竜族達は落ち着かない日々を過ごしていた。どうか何も起こらずに無事に新竜帝が決まってほしい、と公爵も祈らずにはいられなかった。

最有力候補である息子セライナは権力に興味のない無欲な青年であったが、自分が竜帝の地位に就くことに關してはかなり前向きな様子なので、公爵は内心意外に思っていた。

父公爵との食事の席で、セライナはこう打ち明けた。

「もし私が竜帝の座に就いて落ち着いた晩には、叶えたいことがあります」

公爵は、息子がこうした個人的な望みを口にするのは珍しい、と興味をひかれて尋ねてみた。

「それは何だね」

「猫を妻にします」

「ネコヲツマン」

一瞬意味がわからずに、公爵は同じ言葉を繰り返した。そして、その後会話を続け、ようやくセライナが他種族を伴侶として迎えたがっているかと理解したのだった。朴念仁とも言われ、恋人などいたためしのない息子が口にするには、あまりに予想外の希望であった。

「白猫族の第五王子、ミカです」

「王子ってお前……、それは雄ではないのかね？」

「竜族は同性であっても伴侶にします。子作りも問題ないでしょう」

「それはまあ……そうだけどねえ」

公爵は髭を撫でて考えた。

島にある神樹の実の一部は、生物の生殖機能に影響を与える効果を持つ。雄であっても後孔に押し込めば子宮ができるし、雌の膣に入れば一時的に雄のような性器ができて相手を孕ませられるのである。

竜族に同性婚はさほど多くはないが、驚くほど珍しいとも言えない。しかし、他種族の同性相手と婚姻関係を結ぶという例は聞いたことがなかった。

しかも、竜帝が異種族を娶るとなると前代未聞だろう。

「私が竜帝になれば再び下界に降りられる。ミカ王子は不遇な目に遭っていると聞いています。助け出して、私の家族にしたいのです」

「お前が猫好きとは知っていたが、まさか猫族に想い人がいたとはな」

と言いつながら公爵は膝の上で丸まっている三毛猫を撫でた。公爵の屋敷では七匹の猫が飼育されている。どれもセライナがどこから保護してきた猫で、いつしか影響された公爵も愛猫家となっていた。

公爵は四つ足の小さな猫しかまだ見たことがない。天界と下界の間には長い間、行き来できないように膜が張ってあるからだ。

「猫ちゃんか……」

三毛猫は公爵に撫でられ大口を開けて、くああ、とあくびをしている。

「やはり父上はご納得いただけないでしょうか」

「いや、私はそんなに気にならないよ。別に鰐族でも狐族でも、お前が好きな相手を選べばいいと思う。しかしな、周りがうるさいぞ。竜帝という立場になったなら、尚更だ」

大昔からこの種族も民族至上主義は強く支持され、竜族とて例外ではなかった。世界で最も優れているのは竜族だと思っている者は多いのだ。余所者を招くなど言語道断、と頭の固い貴族連中は反発するだろう。

特に竜族は他種族との交流がないに等しい。そう公爵が話すと、セライナは「そこです」と言っ

てナイフとフォークを置いた。

「この世には数多の種族がいる。我々は距離を取り続けてはいけませんのだと思います。私の代で全てを変えるつもりです。竜族が傲慢さを極め、いずれ世界を支配しないように。獣人達がそれぞれ理解を深めていけるよう、尽力します」

うん、と猫を愛でながら公爵は頷く。私はよい息子を持った……強面だけれど美形であるし、心根も真っ直ぐだ、と。

セライナがこの先進む道は険しいものになるだろうが、彼なら心が折れることなく立ち向かい続けるだろう。

そう、この顔で睨まれれば誰だって震え上がるだろうし――

「にしてもお前は、その眼光が鋭すぎるのはどうにかならないものかね」

セライナはおよそ柔和とはかけ離れた顔つきなのである。保護した猫も初めは毛を逆立てて怯えており、慣れさせるのに苦労した。

セライナも多少は気にしているのか、目を伏せる。

「表情をつくるのが、苦手なもので……」

「ああ、いい、いい。そう落ち込むじゃない。何事も訓練だ。そのうちにつこりと微笑むことができるようになるよ」

公爵はそう息子を励ました。生い立ちを考えればセライナの表情が常に硬いのも無理がない気もするが、どうにか優しい顔つきを会得してもらいたいものである。

(その猫の王子は、セライナに懐くのかねえ……)
少し心配になりながら、公爵は猫を撫で続けるのだった。



ちやほや、という言葉はミカも知っている。おそらく今の状況が、「ちやほやされる」ということなのだろう。

ミカを見つけた竜族達は、相好を崩してミカを褒めちぎるのである。

「まあ、猫の殿下よ。何て可愛いのでしょうか」

「ご機嫌よう、ミカ様。今日もふわふわの尻尾が素敵ですね」

「ミカ様、これを召し上がってください。魚のパイです」

「ああ、あのぱっちりお目目がたまらないわ……！ 耳はどんな触り心地がするのかしら！」

ミカが通りかかるたびに、城で働く者達はデレデレと話しかけてくる。しかし「ミカ様は陛下のものだから」と、気軽に触れてくる者はなかった。

侍女達は用もないのにミカの部屋まで押しかけて、ミカに甘いお菓子をたくさん置いていく。くるる、と喉を鳴らして棒つき飴を頬張ると、「可愛いー！」と黄色い声を上げて悶絶しながら去っていった。

これにはルデイスも呆れていて、「お気を悪くされたら申し訳ありません、どうかあの者達を許

してやってください。彼女達も猫族を見たのは初めてで……可愛いものに弱いんですよ」と言ってきた。

竜族が長身なのは男女共に変わらない。女性から見てもミカはかなり小さいのである。猫族は竜族から見れば顔が幼く見えるだろう。

褒められるのに慣れていないミカは、いつも曖昧な笑みを浮かべているしかなかった。

醜い黄金の目をしているはずなのに、それについては誰も触れてこない。やはり目の色以前に、ミカという存在自体が異質なので気にならないのだろう。

今日も今日とて竜帝陛下は多忙の身で、ルデイスがミカの様子を見に来た。見せたいものがあるので中庭に行かないかと誘われる。

言われるままに足を運ぶと、緑に溢れた中庭にたどり着いた。天上の島々で見かける花や草木は地上のものとそう大差なく、ミカにとっても馴染み深い種類が多い。

そこはあえて整えず、自然の形を意識したような工夫が施されており、見るからに居心地が良さそうであった。程良い木陰ができるよう木々が植えられ、可愛い小さい花も咲いている。

そんな中を、小さな生き物が走り回っているのが見えた。四つ足で駆け、仲間とじゃれて転ぶもの。大きな石の上で陽を浴びながらぬくぬくと昼寝をするもの。

長い尾にふわふわの毛。尖った耳に、ぴんと伸びたヒゲ。

「猫だ。空の島には猫がいるのですか」

様々な種類の猫達が、思い思いに過ごしている。

「まだ竜族が気軽に地上と空の島を行き来していた時代に、尻尾や背中にしがみついてやってきた猫がいくらかいたんですよ。天界には無人の島もありますから、そこで猫達は増えたようですね。猫は食用にならなかったのを見向きもされなかったと言いますか、見つけて世話を焼き出したのはセライナ様なんです。猫好きなので、城にも連れてきちゃったんですよ」

ルデイスの説明を聞いて頷きながら、ミカは竜族は猫を食べないという部分が引かなかった。

（竜が猫を常食しないなら、私はやっぱり特別な儀式用の食料なのかな……）
大事な餌だから、みんなから優しくされるのかもしれない。

「猫族と四つ足の猫は種が近いですから、仲良くできるでしょう？ ミカ様は空の島で同族の方もおらずに心細いでしょうし、たまに猫達と過ごしてはいいがですか」

頭上を影が横切ったので、ミカは空を見上げた。

竜族が通過していったのだ。竜族は竜の姿になって飛行することもできるし、人の姿で翼だけ生やして飛ぶこともできる。竜の方が速く飛べるので、急ぎの時はその姿になるらしい。

「竜族は獣の姿になれるのでしたね」

生活のしやすさで言えば圧倒的に人型なので、城にいと竜型の彼らを見ることは少なかった。

「猫族の方は猫型にはならないでしたね」

問われて、ミカは頷いた。子供の頃は猫と人のどちらの姿もとれるのだが、ある程度の年齢になると猫族は人型から変わらなくなる。猫耳や尻尾があるだけである。というか、地上の獣人は一部を除けばどの種族でも大抵そうで、竜族は特別なのだ。

「あなたも幼い頃は小さな猫になって走り回っておられた？」

「そうですね。ほとんど覚えていないのですが」

「ミカ様は……白猫族で間違いありませんね？ つまりあなたは、白猫なのですね？」

突然ルデイスが妙に真剣な顔つきで尋ねてきたので、ミカは首を傾げそうになった。

「そうですね……それが、何か？」

耳も尻尾も、髪も白い。おかしいところは金の目だけだ。

ルデイスはミカの耳や尻尾などに視線を走らせて、何か考え込んでいる。

「いいえ、何でもないません」

誤魔化すように笑うと、ルデイスも仕事があるらしく、ミカを中庭に残して去っていった。ここは猫達に気をつかってあまり人が寄りつかない庭なので、くつろぐといとすすめてくれた。

ミカは早速猫達と遊び始める。白猫族の国にも猫はいた。厳選された白い毛並みの猫達は、王宮でも飼われていたから、ミカもその猫達といくら遊んだ記憶がある。

灰色猫をじゃらし、長毛の黒猫を撫でまわす。そうしていると、白い雌猫が子猫達を連れてミカに挨拶をしに来た。

「わあ、子猫じゃないか」

よちよち歩きの猫を抱き上げたミカは、指先でその小さくて温かい生き物を撫でてやる。

「そういえば、兄上達が、赤ん坊はキャベツ畑で生まれるって言っていたけど、お前達もそうなのかな？」

空の島でも野菜はとれるようだから、猫の子が生まれるキャベツ畑もあるのだろうか。ミカは幽閉されていた期間が長いから、世間知らずなのだ。勉強はしたかったので書物は差し入れてもらっていたが、知識にむらがあるのは自覚している。

中庭の猫達はミカに懐いて、順番に撫でられていた。ふと、その撫でている手が止まる。

（私は、いつ竜帝陛下に食べられるのだろうか……）

ルデイスをはじめ、誰もその時期については言及しない。体調が悪くなって、太ってきたら食べ頃になるのかもしれない。

そう考えるとぞつとして、また震えそうになった。いつ、その日が来るかわからない。こちらから尋ねて、変な空気になるのも嫌だった。

（……逃げよう、かな）

唐突に思った。

ミカはこの城で、割と自由に過ごさせてもらっている。竜帝が代替わりして白竜の一族が城に入り、敵もいないからかミカの監視もほとんどないのだ。

今日だって、このように一人きり。ミカが中庭からこっそり抜け出しても、気づく者はいないだろう。

今しかないのではないか。

ルデイスは仕事に戻っている。セライナもここにはいない。ミカの姿が見えなくなったとして、どこかで昼寝でもしていると思われそうだ。

（私は、食べられたくない）

ミカはふらふらと立ち上がり、見当もつけずに歩き出した。と、他の猫達がそれを見守る中、灰色猫だけがついてくる。来ないようと指示するが、どうしても灰色猫は後を追いかけてきてしまうのだ。そもそも猫は他人の命令を聞くような生き物ではない。

ミカは諦めると、灰色猫を抱えて歩いた。

竜帝陛下の住まう城はどこがどうなっているか、まだほぼ知らない状態だ。しかしミカは焦りに突き動かされ、胸に抱いた猫の温もりに励まされながら歩き続けた。

幸い誰とも行き合わないまま、進んでいく。

（地上に戻ろう。そして、猫族にも鼠族にも見つからないところで生きていくんだ）
だって。

だって私は、いない方がいい。

私は怖いのだ。誰かのところにいることが。

私は、私は――

ああ、どこにいても、この心のざわつきはおさまらないのだろうか。

いくつかの庭を突っ切ってひたすら歩くと、見晴らしの良い場所に出た。

目の前には、青空が広がっていた。瑕疵のない滑らかな青が目染みる。その鮮やかさが、胸の中の悲しみを際立たせていた。

竜族は皆飛べるので、危険に見える場所でも落下防止の柵のようなものは設置されていない場合

が多い。

ここも、数歩進めば真つ逆さまに落ちてしまうようなところであつた。臆病者のミカだが、高所は怖くない。下から吹きつけてくる風が、前髪をなぶっていた。

「落ちてみようかな？ 運が良ければ、どうにか生きて着地できるかもしれないし」

ミカは灰色猫の耳元に囁く。猫は「みゃあう」と小さな返事をした。

たとえば強風が吹いて、落下速度が落ちて、木の上の方にしがみついたりできれば助かるだろう。馬鹿げた妄想だが、このまま竜の餌になるのを待つよりはましな気もしてくる。

（この世に、怖くないところは、ないのだろうか）

ぼんやりしていると、空の青に吸い込まれそうだった。

みんな忘れてくれるといいのに。役立たずの白猫のミカ王子は、誰にも知られることなく、どこかで朽ち果ててしまえばいいのだ。

——と、強い風が、下方から吹き上げてきた。

ばさり、ばさりと何かがはたたく音がする。

次の瞬間、巨大なものが出現した。それは黒く光る生き物だった。広げた翼は視界におさまり切らないほど大きく、尾も長い。真昼に夜を切り取ったような竜がそこにいる。

風にあおられながら、ミカは目を見開いていた。

間近で竜を見たのは初めてだった。

黒竜は地面にそつと着地すると、人型へと姿を変える。長身の、黒影のような美しい姿。艶めく

黒い長髪が優雅に揺れる。

竜帝セライナであつた。

人の姿に変わつても竜型の名残である翼は残っていたが、それもたたむと同時に消失してしまう。言葉を失っているミカの腕から力が抜けて、灰色猫は腕から飛び降りるとどこかへ走り去ってしまった。

「帰りたいか？ 地上に」

何か言い訳をしなければと焦っていたが、セライナには見透かされてしまったらしい。こうなると余計に何と言つていいかわからなくなるミカだった。

「無理もないな。強引に連れてきてしまったから。猫の国が恋しいのだろう」

セライナは怒つていなかった。むしろ、声に一抹の悲しみのようなものを感じてミカは戸惑った。私がいなくなると、この方は悲しむのだろうか？ そう思うと罪悪感で胸が苦しくなる。——

私は食べられるのは御免だ——だけど——

「く、国は恋しくありません。戻りたいとは思っておりません」

しどろもどろになりながら、ミカは言葉を発する。一喝されて恐怖で失神できたなら楽だったが、悲しまれるとは予想外で、反応に困った。

「この顔のせいで、随分とお前を脅かしてしまったようだしな」

「いえ、あの、それは……」

怖くないと言つたら嘘になるが、そもそもセライナはとんでもなく美形であるし、その厳めしさ

も魅力の一つではあるだろう。近づきたい雰囲気は周りの気を引き締め、王たる者の品を感じさせる。

笑顔以外はミカも慣れてきていた。

「悪かった。白猫族のミカ王子よ。私の気持ちが先走ってしまい、お前にはつらい思いを……」

「違うのです、陛下！」

いよいよミカは切羽詰まってきた。とにかく自分は食べられたくないのだ。だから食べないでほしいと頼みたい。

けれどそんな訴えをすることが自分に許されるのかがわからない。竜族と白猫族の関係が悪くなつては困るし、自分は黙って食べられるべきなのかもしれない。

それに加えて、何故だかこの人を悲しませたくないという気持ちも出てくる。

結局私が悪いんだ、何が何だかわからなくなってきたが、とにかく私が悪いのだとミカは泣きそうになった。

「こんな猫に価値などありませんから、陛下も私を手放した方がいいのです。こんな、不気味な目をした私は……」

そう言いかけたミカに近づき、セライナがミカを抱きしめた。

「色が違うだけだ。大したことではない。そうだろう？」

色が違う。ミカはセライナのその言葉を聞き、ずっと抱いていた疑問を、つい口にしてしまった。

「陛下は……、白竜の一族でいらっしゃるのですよね……？」

ミカとセライナはゆつくりと身を離す。城で生活するうちにある事実が気について、不思議に思っていたのだ。

竜の国の中枢、竜帝の城で働く者は、白竜の一族が多い。黒い竜は竜帝一人きりだ。

ミカはここへ来て初めて知ったのだが、竜族は五色の種に分かれている。赤、青、緑、黄、白の竜が存在し、黒竜の一族はいないそうなのだ。

セライナは小さなミカを見下ろし、目をそらずに説明した。

「私は色素の異常で、白竜でありながら黒く生まれてきた。そのせいで親に捨てられて貴族に拾われ、公爵子息となったのだ。酷く差別を受けてきた。お前の気持ちは、よくわかる」

はっとミカは息を吞む。

「申し訳、ありません……」

興味本位で尋ねていいことではないとはわかっていたのに、混乱していたせいで言ってしまった。自分は酷く失礼なことをしてしまったのだ。後悔で唇を噛むが、セライナの顔に不快さはにじんでいなかった。

「私が黒色の白竜であるというのとは見ての通りで、隠しているわけでも、触れてはならない事実でもない。色が違うだけで、それは悪いことではないだろう？ お前の目も同じだ。黄金色をしているだけで、それは悪くも醜くもないし、お前のせいでもない」

差別を受けたとセライナは言った。彼も皆と違うせいで、苦勞をしてきたのだろうか。境遇に似たところがあると聞くと、少し彼に親近感が持てる気がした。

「戻りたくなかったならいつでも相談しろ。ここへの滞在を無理強いはいしない。その時はお前を下界に返し、二度と会わない」

セライナのその言葉は願ってもないものだったはずなのに、妙な寂しさを覚えたミカは、何とも返せずにうつむくしかなかった。

2、食べられる？

現竜帝のセライナは、生まれてすぐに捨てられたという。白竜なのに黒く生まれてくるなど不吉でおぞましいと思われたようで、赤子の頃から孤児院で生活していた。

そこでセライナを見つけたのがウィンエル公爵夫妻だ。貴族は慈善活動をするのが美德とされているが、特に公爵夫妻は力を入れており、孤児院の支援をしていた。

夫妻は最初セライナを見て、色は特に気にならなかったが、その鋭すぎる眼光に驚いたという。黒い子竜は異質な外見や愛想のなさもあって、孤児院でも孤立していて不憫^{ふびん}だった。

同情もあつたが、彼には何か光るものがあり、磨いてやりたいと夫妻は思うようになった。元々子供に恵まれなかったという事情もあり、以前から養子をとろうかと話し合っていたのだ。

公爵子息となったセライナはその後ろ盾もあって満足な教育を受け、天才的な資質を伸ばしていった。学問、武芸、どちらも秀でた才を持ち、注目を集めていく。

先の戦争でもその力を見せてつけて信頼を勝ち取り、ついに若くして竜帝の地位へと上り詰めたのだ。



「ああ、可愛い。可愛いわ。なんて似合うのかしら。ミカ様、こちらもお召しになってみましょうか。たつぷりとしたフリルが本当によくお似合いになりますこと！」

うきうきと侍女達が服を並べ、着せかえ人形と化したミカはされるがままになっていた。山のような服だの宝飾品だの、これらのものは全てセライナからの贈り物だという。

着た切り雀で暮らしていたミカには信じられない衣服の量だった。もちろん国からではなく、セライナ個人の金が使われている。

それにしたってかなりの額では、と慄^{おの}くミカだったが、元々公爵子息なので金に不自由はしていなかったのだろう。

繊細なレースの飾り襟だとか、金色の猫目石^{キッツアイ}や緑玉^{エスラルド}だとか、ミカも気になったものがあれば手に取って眺めてみた。兄王子達はいつも湯水のごとく金を使って着飾っていたが、ミカはそんな経験がない。

「さすがに陛下は、センスが良くていらつしやるわあ。ミカ様に何がお似合いになるかわかっているのですね」